

版類について縮尺、大きさ、色調、つくりの精粗、文様の特徴等を順に記している。未知の先史遺物についてのモースの見解が、こうした自然科学者らしい地道な観察に基づいていることがよくわかる。メモは『大森貝塚』の図版解説に一致するものが多いが、さらに観察を深めているものもある。それは特に 03 番台、『大森貝塚』第 1 版にまとめられた代表的な土器に顕著である。『大森貝塚』では厚みに加えてさらに全高や口径の計測値、器形の細部や文様の特徴と単位、網代痕などが追加されている。また破片でも 10 - 16 は仕上がり状態と色彩のメモだが、『大森貝塚』第 8 版 15 には他の土器も含めて、内面の状態についても追記している（モース 1983 : p.100）。

モースは特に土器の色彩に留意していて厚さとともに必須の観察項目となっている。外部のみならず内部の色の違いにも着目している。メモ以外にも 14 - 08 のように図の脇にそのまま範囲を記入したもののさへある。だからといって『大森貝塚』で特に色彩について一項を設けているわけではない。科学者らしく所定の観察を行ったにすぎない。なお土器に付着した赤色顔料はメモ段階では“cinnabar (辰砂)” (08 - 06・08 - 10・12 - 13) だが、『大森貝塚』では“mercury sulphide (硫化水銀)”に変更されている（モース 1983 : p.33）。“Nature”で速報した際も辰砂であったから（Morse 1877）、『大森貝塚』にあるように大学の同僚だったジューエット F. F. Jewett の分析結果を受けてである（モース 1983 : p.14）。

○×印 原図のいくつかには隅に鉛筆で小さく「○」・「×」が付されているものがある。未掲載となった 01 番代には 14 点中 6 点の左隅に「×」が残されている。そして×がある 01 - 08 は 09 - 08 に、03 - 11 は 13 - 36 に再実測されている。しかし×のない 01 - 06 は 14 - 03、01 - 14 も 13 - 35 に再実測されており、厳密ではない。その他に 07 - 07 にも×があるが裏面のみ『大森貝塚』に不掲載となっている。10 - 11 には右隅にあるが、これも採用し掲載されている。「○」は 08 - 06・08 - 07 の右隅にある。同じ土器の上面と側面をそれぞれ示したものである。○×ともに鉛筆書きであることから石版工への指示ではなく、あくまでモースの私的なチェックである。

2.3 実測の痕跡

画像の処理 大森貝塚の実測方法を特徴付けるのが原図に残る小さな「穴」と、そこから定規でごく控えめに引かれた「線」である。その痕跡は原図をそのまま提示しても穴はもちろんのこと線もよく見えない（Fig. 32 - 1）。今回の分析では総合研究博物館で作成した 720dpi の TIFF 画像を Adobe Illustrator CS3 に取り込んで 1200% に拡大し、モニター越しに目視で痕跡を探した。そして本書では本来のカラー画像をグレースケールにし、針穴は径約 1.5mm の●に、線は 0.5pt の太さの実線の上書きした (2)。また軟体動物の裏面に描かれたかすれた線は同じ太さの破線にした。線には後述する「凹線」と呼んだ押圧線もありそれも 0.5pt の白線で示したが、他とのバランスもありひとつだけ太くできず、見分けにくい。巻末の Pl. 1 ~ 166 は処理後の図であり、本文中では必要に応じて未加工の原図や、さらに太さを変えて強調した加工図も用いている。画像を拡大してもどの痕跡もかすかで、個人の目視と解像度の限界もある。今後も折に触れて再調査されることが望ましい。

原図に残る実測作業に伴う痕跡は多岐にわたるが、その詳細は各項目で述べ、ここでは実測に関係する穴と線について概観しておきたい。

穴は線を引くための基点であり、その際に鉛筆ではなく針を多用している。穴は用紙を鋭く貫通し、中には赤黒くなっているものもある。付着した錆びと思われ、鉄製の「針」に困ったことを示している。穴には位置とともに大きさや程度に差がある。単にデバイダーの先で押す程度では貫通までには至らない。現状ではそうした器具の違いまで判別できない。窪み状のものも含めて「穴」、または必要に応じて「針穴」を用いる。ここでは概要について Fig. 31 - 1 と Fig. 32 - 2 に

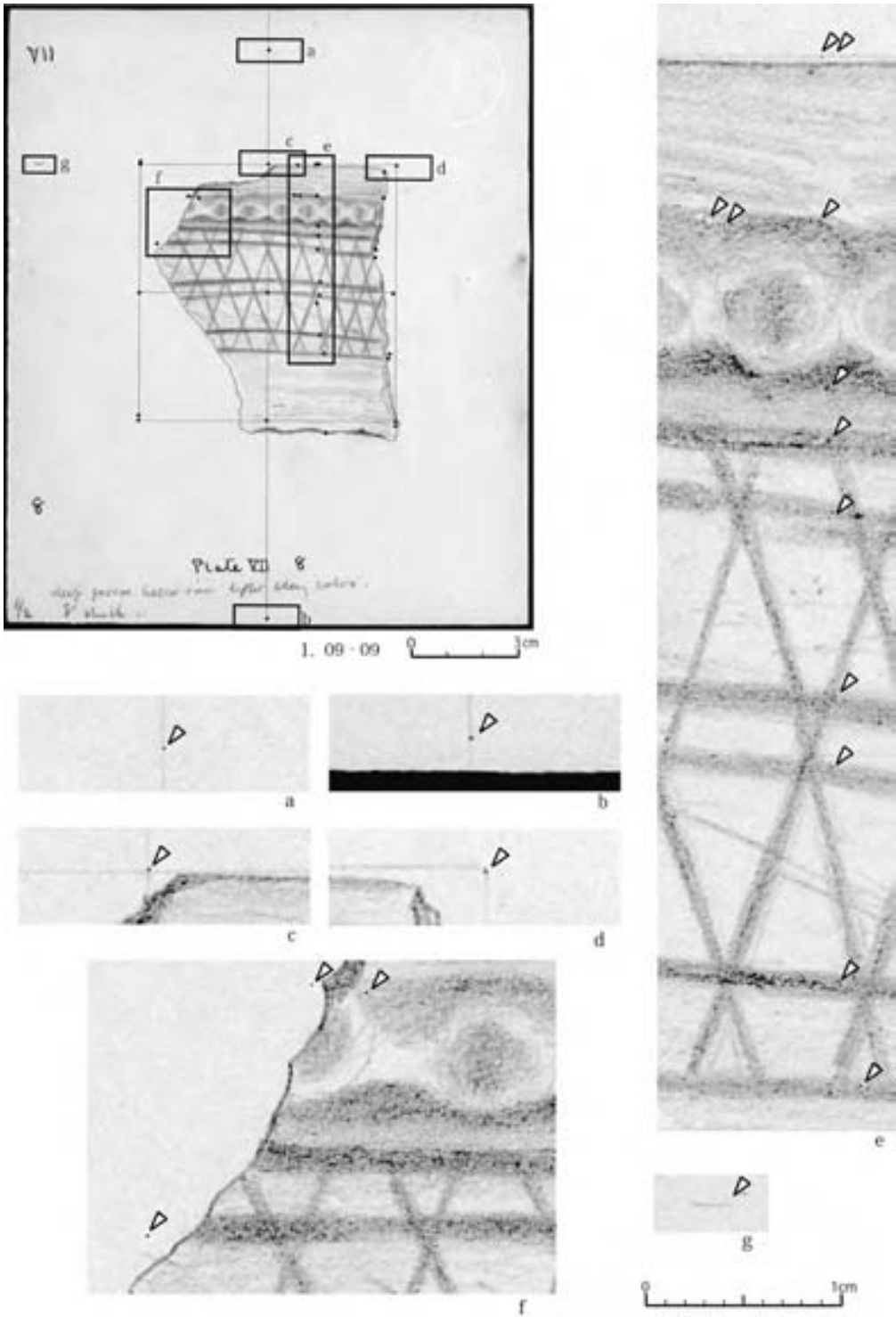


Fig. 33 Overview of marks

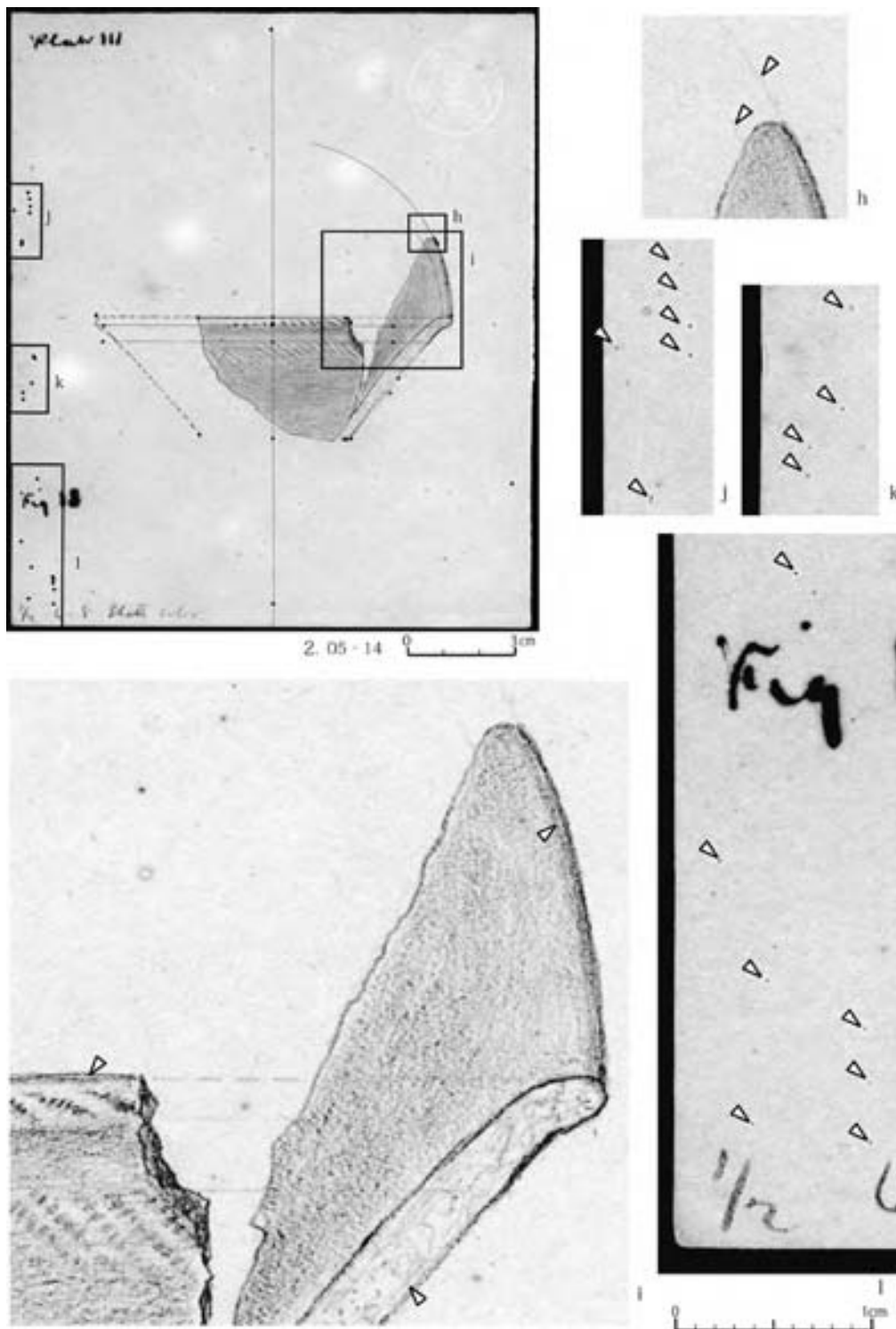


Fig. 34 Overview of marks

処理した原図での位置を示し、a～1には残る痕跡を拡大した。

基準線の穴 主に土器を実測する際、用紙の中心に基準となる「|」の垂直線を引くため天地にあけられた穴である (Fig. 33 - a・b)。何枚か用紙を重ねてあけたために天地間の長さが共通するものや、複数の穴が残るものがある。

区画線の穴 特に土器破片の縮尺図に用いる申型の区画線を設けるために、線の起点や交点に残る穴 (c・d)。時には申ではなく「田」などと省略化されることもある。

逃げ線 区画線には用紙の隅に、必ずといっていいほど延長線上に確認用の短線が引かれている (g)。これを「逃げ線」と呼んでおく。逃げ線は区画を設けない場合にも残されているものがある (13-31)。線を引かなくとも実際には区画によって作図していたことがわかる。

目盛りの穴 土器図の |・申の線上や、線は引かれなくとも一定間隔で線状に並ぶ穴 (e)。5mm 前後の単位であることが多く、土器の外形や文様を作図する際に定規の目盛りを移したのだろう。

測点の穴 土器や土版類の外形や文様のみならず (f)、石器・骨角器・軟体動物を描くために要所に残された穴。土器では外形の測点は少なめで、文様では部分的に粗密の差が大きい。土器の刺突文や押圧文などにもmm単位の測点を求めており、特定部位の細部の作図にきわめて厳密である。土版をはじめ石器や骨角器など区画線のない 1/1 図の外形も数か所の測点から描いている。測点は同じような位置に複数残されていることが多い。要所の内外に残るものもあり、何度も測り直し、描き直したことを示している。モースの図にも針穴があり、特にアカガイ (19-06) では放射肋の条のひとつひとつに測点を記している。

コンパス線 モースはコンパスを使って土器破片から口径を復原しようとしている (Fig. 34 - h)。また定規や分度器とを組み合わせて、突起の位置を規則的に求めようとしている (04-02)。コンパスは底部や、胴部をめぐる同心円状の文様帯にも用いられている。

凹線 特に土器図において白く抜けたような線状の痕跡が認められる。これは鉄筆状のもので紙を押圧した結果と推定され、「凹線」と呼んでおく。凹線も本資料を特徴付けるものであるが、下描きや線の消去痕と見分けがつかないものもある。凹線は外形から文様まで、手描きのみならず定規の直線からコンパスの弧線にさえ残る (i)。要するに下描きを鉛筆によらない方法で行うためである。画像では鉛筆線の下に隠れて部分的にしか認識できないものが多いが、本来連続するはずのものであろう。線のない線という不思議な作業は、石版の下図という実用性からは説明できない。鉛筆の下描きで画面を汚したくなかった画家静山の心情から発したものと考える。

周囲の穴 用紙の縁に、それと並行するように穴が残るものがある (j～l)。複数の穴が集中したり、2～0.5cm 単位の間隔で直線的に並んでいる。しかし全周に満遍なく記されるのではなく、範囲の片寄りや粗密もある。穴列は土器の縮尺図にほぼ限定され、基準線や区画線と連携した位置にあるものが多い。図中の目盛りの穴と同じく、対象ごとに異なったのだろう。具体的な作業形態は不明だが、方眼紙こそ用いていないが 1cm 単位を基本とするマス目のもとで実測され、周囲の穴もこの設定に応じて器具を配した痕跡と考える。

上部の穴 前述の土器図とは別にモースによる軟体動物の図にはすべて、用紙上部に 2 か所の針穴が残る。穴の間隔は個々に異なり、綴じ穴ではなく針で用紙を机上に固定したと考えられる。静山による原図にはこうした穴はない。作業を行う際のモース流のやり方なのであろう。

2.4 土器

3つの基本型 原図の製作はモースの多忙とその性格によって、ごく短期間になされたと考え